

# 令和4年産水稲作付スタート いまいちど水田の転作補助政策を考える

## 麦・大豆を戦略作物として本作化が必要 飼料用米は生産抑制か

令和4年産の水稲の作付けが始まった。田んぼの田起こしや代掻きにより河川の水が濁り本格的な田植えシーズンの真っただ中だ。米どころ東北は寒暖差が大きく苗管理で難儀したり、日中の温度が例年になく高いので苗の育ちが早く田植え時期が1週間程度前進している便りが届いている。さて、本格的な田植え時期に突入したのだが、改めて本年度の水田に関する政策を見返してみた。令和4年産の水田活用直接支払交付金額は3,320億円。対策のポイントは米政策の改革と水田のフル活用推進で麦・大豆・飼料用米等の戦略作物の本作化を掲げ、また高収益作物の導入・定着を支援するといった内容となっている。また、新市場開拓用米は産地と需要者の連携に基づいた低コスト生産への取り組みを支援するとしている。要約すれば、コロナ禍と人口減や食の多様化による主食用米の需要減に対応すべく適正需要量に落ち着かせるための主食用米からの転作誘導、且つ麦や大豆などの世界的な穀物価格高騰対策として国内での作付拡大を促す狙いが垣間見える。今回新たに水田農業高収益化推進助成のひとつとして今回、北海道で始まり東北地方を中心として関心が高まりつつある子実用トウモロコシへの作付転換についても補助金支払いの対象として10a当たり1万円支援と選択の幅が広がった。また、令和12年度までの具体的な政策目標を掲げている。麦・大豆の生産面積の拡大（麦は30.7万ha、大豆は17万ha）と飼料用米70万トン、米粉用米13万トンの生産を拡大、飼料自給率の向上として34%の目標を掲げている。現在、令和3年度の国内における麦の耕作面積は11万5,744ha、大豆は8万5,484haであるので麦は約3倍、大豆は2倍の耕作面積に匹敵する転換目標を掲げている。

さて、米価が落ち着く目安とされている毎年6月末の適正在庫量は180万トンだが、この水準に戻すための令和4年産主食用の減反面積は10万3千haにて、仮に全て麦類と大豆に転作されたとしてもまだ約16.5万ha分は目標値には全く追いつかず更なる主食用米の転作が必要という事だ。これは令和12年度までの目標値であるのであと8年後に国内主食用米の需要トレンドが減少することを見越した数値となっているのであろう。また、気になるのは飼料用米の作付面積だ。令和3年産の飼料用米作付面積は11万5,744haでまだ飼料用米の総生産収量は公表されていないが、仮に本年の作況ベースである平均反収の539kgを作付総面積に掛けると62万3,860トンとなり、上述した飼料用米の生産目標である70万トンにはもう手に届く範囲に近づいている。確か、飼料用米は安倍政権時に110万トンの生産を目指す閣議決定がなされたはずだ。にもかかわらず、令和12年までの飼料用米生産目標値がいつの間にか70万トンと下方修正されたように見える。飼料用米は複数年契約が補助金適用となっているものの、主食用の米価が戻れば過去にも生産者は飼料用米から主食用米にたやすく転換しやすい事から飼料用米の生産量が落ちたという事例があった。また、飼料用米生産の交付金は10a当りの補助金額が高いのではないかと財務省から度々指摘されてきた。実際に今回の政府が見直した結果では今まで実需側と3年以上の複数年契約を締結した飼料用米生産者に対して10a当たり1万2,000円の複数年契約加算の交付金が出ていたのだが、今後は2020年2021年の際に締結した既存の契約面積分だけ22年に10a当たり6,000円を支給、2022年以降の新規契分については支払の対象外と条件を変更した。実質飼料用米生産の抑制に入ったと見てよい。コロナ禍はまだ世界中で一進一退となっているが、回復の兆しと共に世界の主食である麦や大豆、トウモロコシの需要が拡大している影響から飼料価格は上昇し続けており畜産業は悲鳴を上げている。本誌でも指摘してきた通り、国産品の麦大豆や子実トウモロコシの利用拡大で穀物価格高騰の緩和となるべく水田の利活用を推進し、同時に主食用米の適正需要量の生産維持を国策として推進していくことが耕作面積の維持につながるものになると期待したい。畜産県ではなおのこと地産地消で麦や大豆、子実トウモロコシへの転作奨励を、東北

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

や北陸地方の水稲生産主力県においては水稲単作ではなく複合経営を自治体が後押しし、主食用米からの脱却を図るべく地域の同意と創意工夫で動くべき年ではないだろうか。本年度の第1回作付け意向調査は主食用の作付けは22県において昨年よりも作付けは減少傾向との調査報告となっているようだが、令和4年の水稲作は全てのコメ生産者にとって試される年となるだろう。あと、現場に赴いての気づきは田んぼの水尻に被覆肥料の殻を取る網等を設置している圃場がひとつも見られなかったことだ。これは我々業界の農家の皆様への周知が行き届いていない証拠だ。反省すべきことである。

## 世界のコーヒー事情(アフリカ篇)

前回の投稿に続き、今回も筆者が滞在していたアフリカ(ルワンダ共和国)をご紹介します。ルワンダの主要産業は農業であり、中でもコーヒーの栽培が盛んであり、主に輸出用に栽培され、国の輸出額全体の内1/4がコーヒーという正にコーヒー大国です。コーヒーは世界中で愛される嗜好品ですが、その産地について大半の人はブラジルといった中南米をイメージするのではないでしょうか？コーヒーは赤道±25℃のコーヒーベルトと呼ばれる地域で栽培されます(因みにチョコレートのカカオは±20℃)。熱帯性の植物でありながら涼しい環境を好み、且つ適度な雨が必要で、それに該当する地域(山岳地帯)であれば栽培が可能であり、アフリカではタンザニア(キリマンジャロ)やエチオピアが有名ですね。また東南アジアのベトナムやインドネシア産も最近をよく目にするようになりました。そしてコーヒーの品種は大きく3種あり、アラビカ、ロブスタ、リベリカの順に栽培が難しく希少性が高いものになります。同じ品種でもその土地の寒暖差や土壌成分等の影響が大きく風味に出るため、産地毎にブランド化されたコーヒーは独特の風味を持っています。そしてルワンダコーヒーはフルーツのような強い酸味が特徴です。



コーヒーは播種から3年程で2m程の木に成長し、赤い実を付けたら収穫が可能となり、その後3年~7年程は同じ木から収穫できます。収穫は乾季に行われ、ルワンダでは3~6月が収穫期です。収穫後は水洗い処理→果肉除去→種を天日干し→選別をしてコーヒー豆となります。そのためコーヒーとして利用されるのは果肉でなく種になります。また、ルワンダでは個々のコーヒー農家は少なく、大抵は企業が山を一つ二つ購入し、大規模な農園として運営する形態がほとんどです。そのため収穫期になると近くの村人や地方から出稼ぎ労働者をパートで雇い、多い時には50名程のパートさん達が出荷に向け夜遅くまで作業をしています。そのため収穫時期の農園は非常に活気付きます。そして面白いことにほとんどのルワンダ人はコーヒーを飲みません。理由は値段が高い割に美味しくない(苦い)から。現地ではコーヒーよりも砂糖がたっぷり入ったお茶が人気で、休憩の時は大抵お茶が出てきます。パートさん達の給料は大体1日100~200円程、コーヒーの値段も大体100~200円/kgと如何にコーヒーが高価であるかがわかります。そのため収穫されたコーヒーを自分達で楽しむことはなく、そのほとんどが外国へ輸出されてしまいます。なんだか少し寂しい気もしますね。



アフリカンコーヒーの中でもルワンダ産はなかなかお目にかかれませんが、もしどこかで飲める機会があれば生産されている現地のことに思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

(原料グループ 輸入原料部)

夏日になる日も出てきて身体が暑さになれず軽い熱中症になる事もあると思います。「暑熱順化」は暑さに身体が慣れる事です。暑熱順化がすすむと、発汗量や皮膚血流量が増加し、発汗による気化熱や体の表面から熱を逃がす熱放散がしやすくなります。日常生活の中で運動(ストレッチ)や入浴をして汗をかくことで暑熱順化が進むので今から暑さに備えてみてください。編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>